

委託事業実施内容報告書
平成28年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(B)】
実施内容報告書

団体名:株式会社 きぼう国際外語学院

1. 事業の概要

事業名称	「やさしい日本語」による社会参加のための日本語教育と「やさしい日本語」の地域への普及
事業の目的	「やさしい日本語」を外国人の日本語学習の指針とし、その「やさしい日本語」を活用して社会参加を促す。また、地域住民の外国人とのコミュニケーションツールとして「やさしい日本語」を普及していくことを事業の目的とする。 多文化共生社会における地域の共通語としての「やさしい日本語」を普及させることは、在住外国人と日本人の相互理解を深めることにつながり、外国人の社会参加を促すことになる。 このため、在住外国人には、コミュニケーションツールとして学ぶべき最低限の日本語としての「やさしい日本語」を自己表現や、社会参加のために使用できるよう学んでもらい、日本語学習の必要性を感じてもらう。地域住民には、「やさしい日本語」を見聞きし、自分も使用の機会を得ることで、外国人理解を促し、多文化理解への足がかりにする。 こういった双方の「やさしい日本語」がつながり、外国人への日本語教育の重要性を双方が理解できるようになる。また、「やさしい日本語」を通し、外国人と接することは、地域における外国人理解を促進し、多文化共生社会実現のための足がかりとなる。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	栃木県内の在住外国人は、3万人を超え、出身国も112カ国となっている。在留資格としては、永住者が一番多く、その他、定住者や日本人配偶者も加えると、70%近い外国人が長期滞在者である。こういった現状の中、栃木県内の自治体でも多言語化が進められているが、全ての言語に対応することは不可能であり、公文書などの翻訳が進んでも、実際にコミュニケーションをとる人々は多言語を操れる住民ではないので、外国人が日本語を話す必要があり、また日本人がその外国人の日本語を理解する力、その外国人のわかる日本語を使用する必要がある。 こうした状況を改善すべく、当校は平成24年度より4年連続で文化庁の委託を受け、 ①「やさしい日本語」を使つての外国人への日本語教育、生活情報発信 ②地域社会への「やさしい日本語」の普及を目的とした日本人対象の「やさしい日本語」の基礎講座 ③在住外国人が参加しやすい地域社会の体制整備を行い、外国人対応が多いボランティア団体や公共機関などと連携する 以上のような日本語教育体制、外国人理解促進体制整備を行ってきた。 しかしながら、この事業を行う中で、外国人への日本語教育の方法、地域への外国人理解を促すための方法に、まだ課題があった。 ○1. 外国人が自ら学びたいようなテーマ設定をしている教室が少ない ○2. 日本語学習の目標が設定しづらく、モチベーションが上がらない ○3. 地域住民は、「外国人と共に学ぶ」という意識が低い(外国人は支援される人、日本人は支援する人という構図) ○4. 外国人に興味があっても外国人と接する機会がない ○5. 外国人が生活していることを実感として感じられない日本人がいる ○6. 各種団体が外国人を意識していない、興味を持っていない。自分には関係ないことだと考えている。 これらの課題を解決するためには、 ○1-1. 外国人が興味を持つ、自ら学びたいような日本語教室、学んでよかったと思える日本語教室作り ○2-1. 自分の日本語を発信する機会を提供する ○3-1. 外国人と日本人が共に何かを作り上げる場作りや、共に学べる場の提供 ○4-1. 外国人と触れ合うことのできる場の提供 ○5-1. 外国人が地域住民に身近に感じられるような機会の設定 ○5-2. 地域住民と外国人を結ぶための各機関、各団体の連携 ○6-1. 各種団体、機関に外国人の存在を気付かせるような機会の提供 このような取組が必要である。 課題解決のためには、日本語教育機関、外国人自身だけではなく、各種機関、団体が連携し、外国人の存在に気づき、価値観に気付くことだと考えている。
本事業の対象とする空白地域の状況	
事業内容の概要	取組1 自分を表現するための日本語教室(課題○1, 2, 3, 4) 【目的:外国人は自分を表現するための日本語を学び、より豊かな自己表現をすることができる。日本人は実際に外国人と触れ合うことにより外国人への理解が深まる】 自分の人生や、声にならない思いを語るために日本語を使用することで、日本語を学ぶ機会ができ、自分自身の日本語を再確認することができる。自分自身の人生や想いをまとめることは、日本での生活や、これからの人生への自信へとつながる。 また、デジタル映像などを使用する際に、日本人のボランティアと協力することで、日本語の会話力を上げることができる。日本人は、外国人の人生を垣間見、外国人理解を促進することができる。 開催会場を、地域の中間支援施設にし、他のボランティアと顔を合わせる場面を作り、そこで、外国人の存在を知ってもらう。外国人は、こういったボランティアで中間支援施設があることを知り、今後の活動にいかせるようにする。 実際に参加するボランティアは、外国人の姿をみることができ、実際の外国人の日本語能力や、人柄に触れることができる。 取組2:「マイライフストーリー」発表(課題○2, 4, 5, 6) 【目的:取組1で作成した「マイ ライフ ストーリー」を、地域住民が多数参加するお祭りなどで発表し、日本語力のモチベーションの向上、日本語での表現力を高める。また、地域住民に外国人の存在や外国人の想いを理解してもらい、外国人の理解を進める。】 発表の場を設けることで、モチベーションの維持、向上に効果があると思われる。また、お祭りを開催している自治体、団体、実行委員会などと話し合いを進めることで、外国人とそういった団体を連携させることができる。発表だけでなく、前日や当日の手伝い等も行い、外国人と日本人の顔の見える関係を作る。そして、今後のそれぞれの活動にそれぞれの人材をいかしていく。 また、地域住民に発表を鑑賞してもらうことで、外国人の生の声、想いを知ることができ、外国人の背景を知ることにより近い存在となることができる。 取組3:ボランティア団体と外国人住民のマッチング事業検討会議(課題○3, 4, 5, 6) 【目的:在住外国人の地域参加に向けた体制整備に対する検討を念頭に、「やさしい日本語」やその活用に対する共通理解を深めることを目標とする。また、連携機関の拡充に伴い、「やさしい日本語」に携わる者が外国人・日本人ともに増えることが期待される為、方向性や手法のずれが生じないよう日本語教師が中核となってコントロールしていく。各関係機関が持ち寄った「外国人住民と日本人住民の交差する場」について更に検討し、お互いの連携の仕方を見つかることも目標とする。その交差する場に実際に外国人が参加できるよう仕組みづくりをし、外国人住民が活動に参加するために必要な日本語をどのように身に付けたいかを検証し、その実現に向け、取り組む体制整備をする。】 検討会議への在住外国人の参加を増やしたり、有識者をよんだ勉強会を開催するなど、より具体的な情報を収集・検討する。特に、在住外国人に参加してもらうことにより、体制整備の主体となる検討会議参加者自身が在住外国人と対峙する機会を創出し、「やさしい日本語」を参加者自身が実際に使うことで、「やさしい日本語」の有用性と普及の重要性を理解してもらうことをねらいとする。同時に、これは、参加してもらう在住外国人にとって、相談できる機関があることを知る機会となり、利用促進を期待できる。 さらに、「やさしい日本語」では対応できない場合も想定されることから、どのような場面でより専門的な対応が必要になるのかも検討する。多言語対応を含めた検討は「やさしい日本語」の正しい理解と活用につながる。これにより、これまで日本人を対象としてきた機関とこれまで在住外国人を対象としてきた機関の「やさしい日本語」を活用した具体的な連携の形を明らかにし、体制整備につなげる。また、在住外国人の参加を増やしそこで発話状況などを実際に観察し、どのような日本語が理解できどのような日本語の理解が難しいのか、そのコントロール方法などの実例を見せていくことで、「やさしい日本語」話者の拡大につなげていく。外国人参加者にとっては、まだ日本語に自信がなくても、安心して自身の意見を日本語で話せる場、日本人が聞いてくれる場として、外国人だけのコミュニティから一歩抜け出した居場所が提供できるであろう。

	取組4:外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信(課題1, 2, 5) 【目的: 栃木県全域に流れるFMに外国人が出演することで、聴取者である地域住民が外国人の存在を知るきっかけとなる。外国人がどんなところで困ったり悩んだりしているかを聞くことで、近くに住む外国人の理解を促進できると考える。川柳の作成に、国際交流協会員以外の団体が参加することにより、普段外国人とつながりのない日本人に、外国人と触れ合う機会をつくることができ、そのふれあいを通して、外国人理解が進む。また日本語教師が番組に出演し、「やさしい日本語」で外国人の話を聞きだしたり、フォローすることで、リスナーが「やさしい日本語」がよくわからなくても聞く機会を持つことができ、また、日本語教師という職業をFMを聞いている人が知るきっかけにもなり得る。川柳を作るプロセスで、外国人は日本人の助けを借りながら言いたいことを伝える日本語を学ぶことができ、発表者は声での表現の向上を意識するようになり、より能動的な日本語学習への働きかけとなる。】 各国際交流協会の日本語教室から川柳を募集することで、受身の参加ではなく、積極的参加になると考えられ、当校と各国際交流協会、FMとちぎと各国際交流協会、FMとちぎと外国人が連携することができる。また、国際交流協会のみならず、「国際」などとは関係ないボランティア団体と外国人と一緒に川柳を作成することで、交流が生まれ、地域住民への外国人理解を進めることができる。不特定多数のFMリスナーが外国人の気持ちを聞くことで、外国人とつながることができ、外国人の社会参加に欠かせない「外国人理解」を促進することができる。 川柳は放送された分を冊子にまとめ、地域のイベント会場等で配布する。この冊子が、在住外国人理解へのきっかけとなる。
事業の実施期間	平成28年4月～平成29年3月(12か月間)

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

【運営委員】

1	結城 史隆	白鷗大学
2	行本 リジア	鹿沼市国際交流教会
3	Sueyoshi Ana	宇都宮大学
4	小林 忠教	栃木県国際交流教会
5	梅木 由美子	宇都宮大学
6	齋藤 禎	栃木県社会福祉協議会
7	鈴木 美恵子	NPO 栃木タイムズ
8	坂本 文子	宇都宮市政研究センター



【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成28年6月3日 (金) 18:30～21:30	3時間	宇都宮市民中央福祉センター	結城史隆、行本リジア、Sueyoshi Ana、小林 忠教、梅木 由美子、齋藤 禎、鈴木 美恵子、坂本 文子	1. 事業内容の検討 2. 広報の仕方
2	平成28年10月17日(月) 18:30～21:30	3時間	宇都宮市民中央福祉センター	結城史隆、行本リジア、小林 忠教、梅木 由美子、齋藤 禎、鈴木 美恵子、坂本 文子	1. 中間報告 2. 事業の改善点等の洗い出し
3	平成29年2月24日 (金) 18:30～21:30	3時間	宇都宮市民中央福祉センター	結城史隆、行本リジア、Sueyoshi Ana、小林 忠教、梅木 由美子、齋藤 禎、鈴木 美恵子、坂本 文子	1. 事業報告 2. 事業の課題の洗い出し 3. 地域課題の洗い出し
4					

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	地域の大学、国際交流協会、ボランティアセンターなど、今まで連携してきた団体のほか、新たに連携ができた社会福祉協議会、別地域の国際交流協会とも協力体制をとっていきたい。その他、各部署の外国人窓口との連携を強化したい(広報協力及び研修依頼、外国人窓口での団体紹介による外国人の繋ぎなど)。宇都宮市社会福祉協議会とは、住みやすい地域作りを、外国人という視点からも共に探り連携を図る。そして、公的機関に、日本語教育の重要性、日本語教師の存在を知ってもらい、地域の国際化に不可欠な存在であることを認知してもらう。 連携は、団体同士だけではなく、在住外国人との各団体の連携、外国人同士、外国人と地域日本人との連携も促し、外国人の社会参加を図っていく。ボランティアセンターを通し、NPOのみならず、大学、県立高校、自治体との連携、協力体制を強化する。 また、FM栃木との連携は、FM栃木が持つネットワークとつながる。栃木県内の各市町、栃木県内企業、近隣県の公共機関団体、企業などと外国人、または、日本語教育関係機関が連携できる可能性がある。在住外国人とそれらの機関が知り合うことは、それらの機関と各国際交流協会、留学生が所属する大学、所属している派遣機関へと連携を広げることができる。 外国人に関係があるという団体だけではなく、一見外国人とは関係のないような機関がこの取組に参加できるようにする。特に、地域の公的団体(ボランティアセンター、社会福祉協議会など)とセミナー等の共催などを行い、連携を強化する。
------	--

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業体制の実施	コーディネーターは、申請団体として事業に取り組み、過去の連携を維持、強化し、より一層の日本語教育への理解等を進める。 事業担当者は、それぞれが、公共団体、各種団体へとつなぐ役割をし、運営委員会での意見をもとに、新しい連携の開拓等を行う。 運営委員会には、県内の大学教授、福祉関係者、県国際交流協会のメンバーが関わっているため、申請事業の連携を、それぞれの専門をいかし、地域福祉から見た外国人、政策研究から見た外国人など、様々な観点から、事業の評価をする。また、それぞれの団体が協力体制が取れるかどうか検討する。
----------	--

3. 各取組の報告

＜取組1＞										
取組1	取組の名称		自分を表現するための日本語教室							
	取組の目標		自分の人生や、声にならない思いを語るために日本語を使用することで、日本語を学ぶ機会ができ、自分自身の日本語を再確認することができる。自分自身の人生や想いをまとめることは、日本での生活や、これからの人生への自信へとつながる。また、デジタル映像などを使用する際に、日本人のボランティアと協力することで、日本語の会話力を上げることができる。日本人は、外国人の人生を垣間見、外国人理解を促進することができる。							
	取組の内容		地域在住外国人が自分の人生を語る場や、自分の生い立ちなどを語れる場は少ない。今までの取組の中でも、「自分の経験や思いを伝える場があったよかった」という感想を、「やさしい日本語」講座講師として参加した外国人住民が述べていた。自分の思いを誰かに伝えたいと思っている外国人は多い。また、そういった外国人の話を聞いてみたいと思っているが、外国人の友人などがいないので、聞いたことがなかったという感想を取組の中で日本人から聞くことができた。そこで、外国人が自分の人生を語るための日本語が学習できる場、また日本人と外国人が交差する場を設ける。 2時間10回の講座を開き、その中で自分の生い立ちや、人生、自慢話、悲しい出来事、日本への思いなどをテーマにした「マイライフストーリー」の作文を完成させる。参加者の状況にあわせ、「やさしい日本語」講座も開催する。 講師、または受講者同士で対話しながら、自分の話したいことをまとめ、講師の指導を受け、作文にしていく。その時の作文日本語の基準として、対話の日本語の基準として、「人に伝わる、やさしい日本語」を設定する。 作文の他に、作文に合わせたデジタル映像も作成していく。写真や動画を取り込み、作文の朗読に合わせた映像をパソコンのボランティア、映像のボランティアなどの力を借りて、仕上げる。 この講座を3ヶ所で行う。 事業の評価は、参加者へのアンケート、インタビューをもとに、指導者、コーディネーター連携先の関係者へのインタビュー等も行い、運営委員会に報告、評価をする。							
	☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動								
	取組による体制整備		開催会場を、地域の中間支援施設にし、他のボランティアと顔を合わせる場面を作り、そこで、外国人の存在を知ってもらう。外国人は、こういったボランティア中間支援施設があることを知り、今後の活動にいかせるようにする。 実際に参加するボランティアは、外国人の姿をみることができ、実際の外国人の日本語能力や、人柄に触れることができる。							
	取組による日本語能力の向上		作文を作成するための日本語学習、人に伝えるためのやさしい日本語、デジタル映像を作成するための会話などを学習することができる。 自分の人生に自信を持つことは、日本語学習への向上心を芽生えさせると思われる。日本語学習の漠然としていたゴールも見えてくると思われる。							
	参加対象者		在住外国人、ボランティア（地域住民）				参加者数 （内 外国人数）		18人 （ 10人）	
	広報及び募集方法		チラシを作成し、各中間支援施設、各国際交流に置く。SNSを活用し広く宣伝する。、							
	開催時間数		総時間60時間				1回 2 時間 × 30 回			
	主な連携・協働先		栃木市ボランティアセンターくらら、鹿沼市ボランティアセンターふらっと、宇都宮市ボランティアセンターまちびあ、県立学悠館高校、とちぎNPOボランティアセンターぼぼら、白鷗大学未来創造ネット							
	開催場所		栃木市ボランティアセンターくらら、鹿沼市ボランティアセンターふらっと、宇都宮市ボランティアセンターまちびあ							
	参加者の出身・国別内訳 （人数）		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
			1	3	0	0	2	0	0	2
			カンボジア（1人）、インド（1人）							
実施内容										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容		指導者名	補助者名	
1	平成28年7月12日 （火） 13:00～17:00	4	きぼう国際外語学院	1	発表エピソード選定	対話を通し、日本での生活で印象的だったエピソード・その時どんな感情を抱いたか・何を伝えたいかといった盛り込む内容を絞った。		日吉 達也		
2	平成28年7月19日 （火） 13:00～17:00	4	きぼう国際外語学院	2	目標設定	活動の中で、日本語を「書く・話す」のどちらに力を入れたいか、またどのような日本語を習得したいかを確認し、原稿を書き進めた。		日吉 達也		
3	平成28年7月26日 （火） 13:00～17:00	4	きぼう国際外語学院	2	原稿推敲	参加者同士でお互いの原稿を紹介し、もっと聞きたいことやわかりにくい点などを指摘し、それを踏まえ加筆修正を行った。		日吉 達也		
4	平成28年8月2日 （火） 13:00～17:00	4	きぼう国際外語学院	1	動画作成	表現と発音をより自然な日本語になるよう指導し、納得のいくまで音声の録音を行った。		日吉 達也		
5	平成28年8月21日 （日） 13:00～17:00	4	コミュニティcafé「みんなのおうち」	2	発表エピソード選定	対話を通し、日本での生活で印象的だったエピソード・その時どんな感情を抱いたか・何を伝えたいかといった盛り込む内容を絞った。		日吉 達也		
6	平成28年8月24日 （水） 13:00～17:00	4	コミュニティcafé「みんなのおうち」	1	目標設定	活動の中で、日本語を「書く・話す」のどちらに力を入れたいか、またどのような日本語を習得したいかを確認し、原稿を書き進めた。		日吉 達也		
7	平成28年8月28日 （日） 13:00～17:00	4	宇都宮大学ラーニングコモンズ	2	原稿推敲	参加者同士でお互いの原稿を紹介し、もっと聞きたいことやわかりにくい点などを指摘し、それを踏まえ加筆修正を行った。		日吉 達也		

8	平成28年8月31日 (日) 13:00~17:00	4	コミュニティ café「みんな のおうち」	2	動画作成	表現と発音をより自然な日本語になるよう指導し、納得のいくまで音声の録音を行った。	日吉 達也	
9	平成28年12月3日 (土) 13:00~17:00	4	まちなか交流プラザ	1	発表エピソード選 定	対話を通し、日本での生活で印象的だったエピソード・その時どんな感情を抱いたか・何を伝えたいかといった盛り込む内容を絞った。	日吉 達也	
10	平成28年12月10日 (土) 13:00~17:00	4	まちなか交流プラザ	1	目標設定	活動の中で、日本語を「書く・話す」のどちらに力を入れたいか、またどのような日本語を習得したいかを確認し、原稿を書き進めた。	日吉 達也	
11	平成29年1月8日 (日) 13:00~17:00	4	佐野市市民 活動センター ここねっと	1	発表エピソード選 定	対話を通し、日本での生活で印象的だったエピソード・その時どんな感情を抱いたか・何を伝えたいかといった盛り込む内容を絞った。	日吉 達也	
12	平成29年1月15日 (日) 13:00~17:00	4	佐野市市民 活動センター ここねっと	1	発表エピソード選 定	対話を通し、日本での生活で印象的だったエピソード・その時どんな感情を抱いたか・何を伝えたいかといった盛り込む内容を絞った。	日吉 達也	
13	平成29年1月29日 (日) 13:00~17:00	4	佐野市市民 活動センター ここねっと	2	目標設定	活動の中で、日本語を「書く・話す」のどちらに力を入れたいか、またどのような日本語を習得したいかを確認し、原稿を書き進めた。	日吉 達也	
14	平成29年2月5日 (日) 13:00~17:00	4	佐野市市民 活動センター ここねっと	1	原稿推敲	参加者同士でお互いの原稿を紹介し、もっと聞きたいことやわかりにくい点などを指摘し、それを踏まえ加筆修正を行った。	日吉 達也	
15	平成29年2月19日 (日) 13:00~17:00	4	佐野市市民 活動センター ここねっと	1	動画作成	表現と発音をより自然な日本語になるよう指導し、納得のいくまで音声の録音を行った。	日吉 達也	
11								

(1)特徴的な活動風景(2~3回分)

○取組事例①

【第5回 平成28年8月21日】

宇都宮大学関係者の有志が活動を行なっているコミュニティ-café「みんなのおうち」にて初回のセッションを実施した。初回の主な内容は発表するテーマを選定すること。「自分が話したいこと」はもちろん、「日本人が興味を抱く話題」に気付くためにも、対話を通して話題を絞っていく。外国人参加者は日本で生まれ育ったフィリピン人と学部2年生の中国人留学生で、自己表現のための日本語は既に身につけていて、日本人との対話セッションも途切れることなく続いた。話を聞きながら日本人が印象的なフレーズやもっと聞きたいと思うポイントを付箋に思い思いに書き、用紙に貼っていく。相手を変えて数回セッションを行なうことで「本当に自分が話したいこと」や「聞かせたいこと」がより輪郭濃く浮かび上がったようだ。

それぞれに習得日本語の目標を設定したところ、「会社のプレゼンで使うような日本語」「失礼さを一切排除した日本語」と、後の活動で日本語を指導する立場にある日本人が及び腰になってしまうようなハイレベルな日本語の習得だった。



○取組事例②

【第15回 平成29年2月19日】

デジタルストーリーテリング最終工程である動画作りの日。事前準備していたスライドショー用の写真の選定と切り替わりのタイミングを確認し、いざ録音。大衆の面前で発表する一度限りのスピーチとは異なり、何度も納得できるまでリメイクできる点がこの手法のメリットだ。また、自分の声を客観的に聞くことによって「今の発音はちょっとおかしい」「もう少し強く言ったほうがいい」など、他者からの指摘ではなく内発的なモチベーションによる改善・修正が促せる。今まで自分では普通に使ってきた、正しく使えていると思っていた日本語が、「ん？今なんて言った？」「多分こう言いたいんだろうな」といった聞き手側の推測による補完で成り立っていたことにも気づいたようだ。

録音した音声を聞き、言いやすさ伝わりやすさを優先に他の言い回しを日本人側から提案していく。同じ内容でも様々な表現がある。少し言葉が変わるだけで意味合いが大きく変わる。それは今までなんとなく感じていたことだが、改めて日本人に教えられることによって確信に変わり、確かな知識になっていく。日本語学習はまったく新しい知識を与えることだけではなく、そんな一人では整理しきれないものもやめたものに筋道を通してあげる役割もある。

マイライフストーリーの内容もそうで、なんとなく思っていたこと、でも誰を相手に話せばいいかわからない、言うことに躊躇してしまうような気持ちを整理し、筋道立てて吐き出す機会となったようだ。



(2) 目標の達成状況・成果

取り組み後のインタビューでは「普段なんとなく考えているけれど、話したことのないことがアウトプット出来てよかった」「親しい人はいるけれど、親しいからこそ話せない内容もここでは話すことが出来た」「スピーチと違って名前や顔を見せなくていいから言いたいことが言えた」といった声があり、本取組が自分の中の本音と向き合ういい機会となったと捉える外国人が多かった。日本語に関しては、表現することの難しさを感じつつも「どういう言葉を使ったら伝わるかが分かった」「どうしてその言い方がおかしいのか教えてもらえて嬉しい」と誤りを指摘され正しく直してもらうことに抵抗はなく、むしろ自信に繋がったようだ。

参加した日本人へのインタビューでは、「一口に外国人といっても様々なバックグラウンドを持っていて驚いた」「母語以外の言葉で自分の気持ちを話せてすごい」「外国人と話して分かったのは異文化よりも共通点の多さ」といった驚嘆の感想が多かったことから分かるように、外国人と話すこと自体が新鮮な体験と感じる日本人は少なくなかった。

(3) 今後の改善点について

仕事の都合やビザの都合で作品が完成するに至らなかった外国人が予想よりも多かった。一人の外国人と、一人の日本人がじっくり時間をかけひとつの作品を共に作っていく過程に重きを置いて企画したものだったが、それが実現できたとは言いがたい参加状況だった。本取組のみへの参加者を募るより、定期的に複数の外国人が集まる場(ボランティア教室)などの一角を借りて、実際に活動を行なっている様子を見せると、興味を持ってもらうにも声を掛けるにも効果的なのではないかと推測している。

今回は各中間支援施設に企画を持ちかけ、興味がありそうな外国人に声を掛けてもらうという手順をとったが、そこで「この人の日本語力なら出来る」「この日本語力では無理だろう」というふるい分けが生じていたようだ。これは客観的な裏づけによるものではないが、「完成度の高いものを作らなければならない」「優秀な人材を紹介しなければならない」といった見栄のようなものが透けて見える場面がいくつかあった。表面化していない無意識のものであるからこそ、本取組の狙いとするものとのねじれを解消することの難しさを感じた。

<取組2>

取組2

取組の名称		「マイライフストーリー」発表						
取組の目標		取組1で作成した「マイ ライフ ストーリー」を、地域住民が多数参加するお祭りなどで発表し、日本語力のモチベーションの向上、日本語での表現力を高める。また、地域住民に外国人の存在や外国人の想いを理解してもらい、外国人の理解を進める。						
取組の内容		取組1で作成した「マイ ライフ ストーリー」の作文を発表する。 外国人のために開催されるスピーチコンテストのようなイベントではなく、地域で開催されるイベント(協働まつり、駅前まつり等)にて発表する。 取組1で作成したデジタル映像などを流しながら、自分で語る、または、映像のみにし、その映像の中で自分の声で語る。 SNSでの公開や、YouTubeでの公開も視野に入れ、どのような媒体で、公開するのかについても、ボランティアなどの力を借りながら進める。 事業評価は、聴衆へのアンケート実施、発表者への振り返りインタビューをもとに、指導者、コーディネーター、連携先担当者で評価し、運営委員会に報告。運営委員会にても評価を行う。						
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動							
取組による体制整備		発表の場を設けることで、モチベーションの維持、向上に効果があると思われる。また、お祭りを開催している自治体、団体、実行委員会などと話し合いを進めることで、外国人とそういった団体を連携させることができる。発表だけでなく、前日や当日の手伝い等も行い、外国人と日本人の顔の見える関係を作る。そして、今後のそれぞれの活動にそれぞれの人材をいかしていく。 また、地域住民に発表を鑑賞してもらうことで、外国人の生の声、想いを知ることができ、外国人の背景を知ることにより近い存在となることができる。						
取組による日本語能力の向上		人の前で発表することにより、発音の矯正や、日本語の抑揚など、普段ボランティア教室等では学習できない内容を学習することができる。 また、外国語(日本語)で語ることは、自信にもつながり、今後の日本語学習意欲向上へのきっかけになる。						
参加対象者		取組1に参加した外国人学習者 映像等ボランティア			参加者数 (内 外国人数)		15人 (10人)	
広報及び募集方法		取組1に参加した外国人学習者から、参加希望者を募る 観覧者 チラシの配布、イベントチラシへの掲載						
開催時間数		総時間 12時間(空白地域 時 間)						
主な連携・協働先		とちぎNPOボランティアセンターぽぼら、栃木県内中間支援施設、自治体、白鷗大学未来創造ネット						
開催場所		栃木市ボランティアセンターくらら、鹿沼市ボランティアセンターふらっと、宇都宮市ボランティアセンターまちびあ、各イベント会場						
参加者の出身・国別内訳 (人数)	中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
	2	2			1		1	
	カンボジア1、ペルー3、日本5							

実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容	指導者名	補助者名
1	平成28年10月23日 (日) 13:~16:00	3	栃木総合運動公園	3	マイライフストーリーの発表	完成した「マイライフストーリー」の上映	日吉 達也	熊倉スパッタラー、近藤ポア
2	平成28年11月19日 (土)、20日(日) 11:00~14:00	6	宇都宮大学	15	マイライフストーリーの発表	完成した「マイライフストーリー」の上映	日吉 達也	
3								
4								
5								
6								
7								
8								
9								
10								

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第1回 平成28年10月23日】

栃木市総合運動公園において行なわれた「第13回 とちぎ協働まつり」にて、体育館の一角にブースを設け、完成した「マイライフストーリー」を上映した。また取組4で書いた外国人川柳「にほんご・しち・ご」も併せて展示を行なった。

本取組には「外国人」や「国際」といったキーワードを普段意識していない日本人に外国人の声なき声を届けるという狙いがあるが、幸い、スタンプラリーのスタンプ設置場所の担当にもなっていたため、集客には事欠かなかった。興味を持ってくれる人が一定数集まったら上映するという段取りを組んでいたが、次々と流れていく来場者をこの場に留めることは不可能だった。

その代わり、協働まつりのテーマである「共に」にのっとり、来場者と外国人が言葉を交わしあいながら一緒にインスタント写真を取り、模造紙に写真を貼り、思い思いの絵を書き込んで一つの作品を作り上げていくというスタイルをとった。子供たちが絵を書いている間には、親御さんたちに上映待ちの間に配布予定だった「外国人クイズ」を対話形式で行い、自身の中の外国人観と向き合った後マイライフストーリーのスクリーンをお土産に配布した。



○取組事例②

【第2回 平成28年11月19日、20日】

宇都宮大学峰キャンパス内で行なわれた学園祭「第68回峰ヶ丘祭」にて、喫茶コーナーの一角にブースを設け、ドリンクが提供されるまでの待ち時間に完成した「マイライフストーリー」を上映した。また取組4で書いた外国人川柳「にほんご・しち・ご」も併せて展示を行なった。

本取組には「外国人」や「国際」といったキーワードを普段意識していない日本人に外国人の声なき声を届けるという狙いがあり、興味を持ってもらうきっかけとして栃木県の在住外国人のデータをもとにしたクイズから始めた。栃木県に住んでいる外国人の数、国籍はどこが一番多いか、など。とりわけ驚愕していたのがどのくらいの国籍の外国人がいるかだった。

日本人からの感想で「最近外国人をよく見かけているけれど、知らないことが多く、身近にしながら自分の中では遠い存在だった」とする声が多かった。

飲み物が提供され、おしゃべりをし、興味深くブース内を見ていった日本人とそうでない人の割合は半々だったが、よくよく話を聞いてみると同じゼミに留学生がいたり、同僚に外国人がいたり普段から「外国人」や「国際」といったものに多少なりとも触れている日本人が殆どだった。外国人が増えるに伴い、興味の深さはともかく外国人と本当に無関係の日本人は少なくなっているのだろう。



(2) 目標の達成状況・成果

様々な団体との打ち合わせを行なうことにより、在住外国人の存在そのものを催し物の運営側に広く周知することが出来た。話し合う中で、今までイベントを運営する際、外国人の参加という発想がなかった団体も、今後外国人の参加者を募集したり、外国人にも伝わるような告知方法を考えていなど、前向きな発言があった。実際にその通りになるかどうかは、次年度の動きを観察したい。

発表の視聴ターゲットは普段「国際化」や「多文化」にあまり興味のない層で、マイライフストーリーの視聴を目的に集まった人たちではなかったため、その場に引き止めることが難しかった。しかし、アンケートを見ると「外国人と日本人といっても本来は1人の人間として同じであることに気付いた」「人種を超えて同じ人間であり、違いよりも共通点も探していきたい」といった点が多く書かれており、価値観が揺らぐほどの気付きに繋がった日本人もいた。

日本人の前での発表による外国人の日本語上達も当初は想定していたが、知らない人の前で話すこと・顔を見られることへの抵抗があり、発表スタイルは上映のみだった。

(3) 今後の改善点について

本取組の狙いは「外国人」や「国際」といったキーワードを普段意識していない日本人に外国人の声なき声を届けるというもののだが、会場探しに難航した。また、音声主体のものを発表し静かに耳を傾けてもらうには、イベント音楽などの様々な音であふれており、視聴する環境として適していたとは言いがたいものがあった。

現時点では、老若男女を問わず多くの人が集まる大きな会場でなくても、例えばネイルサロンのように必然的に待つ時間があるような場所に話を持っていくのはどうだろうかという案は出ている。

作品の性質上、SNS等を利用して広く周知させることも可能だが、本年度はそれを行なわなかった。人が集まる会場は一度きりだが、各人の持つデバイスが発表会場となりうるなら、複数回見ることも可能で拡散性もあるWEBでの発表方法を開拓するのもひとつの手だろう。

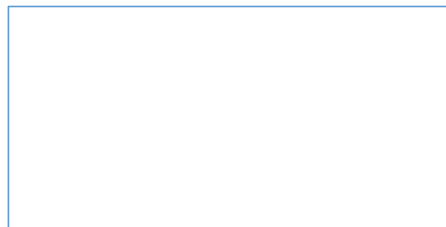
＜取組3＞										
取組3	取組の名称		ボランティア団体と外国人住民のマッチング事業検討会議							
	取組の目標		平成27年度は、在住外国人の地域参加促進のための体制整備を念頭に多様な主体による情報共有を行った。その結果、これまで主に日本人を対象としてきた機関と、これまで在住外国人を対象としてきた機関では、取組の前提となる現状認識にばらつきがあった。そのため、「やさしい日本語」に対する認識を参加者全員が深めていくこと、同時に、その活用方法を具体的な取組につなげるためのさらなる研究と検討が必要であることが課題として残った。 以上をふまえ、平成28年度は、在住外国人の地域参加に向けた体制整備に対する検討を念頭に、「やさしい日本語」やその活用に対する共通理解を深めることを目標とする。また、連携機関の拡充に伴い、「やさしい日本語」に携わる者が外国人・日本人ともに増えることが期待される為、方向性や手法のずれが生じていかないよう日本語教師が中核となってコントロールしていく必要がある。							
	取組の内容		具体的には、検討会議への在住外国人の参加を増やしたり、有識者をよんだ勉強会を開催するなど、より具体的な情報を収集・検討する。特に、在住外国人に参加してもらうことにより、体制整備の主体となる検討会議参加者自身が在住外国人と対峙する機会を創出し、「やさしい日本語」を参加者自身が実際に使うことで、「やさしい日本語」の有用性と普及の重要性を理解してもらうことをねらいとする。同時に、これは、参加してもらう在住外国人にとっても、相談できる機関があることを知る機会となり、利用促進を期待できる。 さらに、「やさしい日本語」では対応できない場合も想定されることから、どのような場面でより専門的な対応が必要になるのかも検討する。多言語対応を含めた検討は「やさしい日本語」の正しい理解と活用につながる。これにより、これまで日本人を対象としてきた機関とこれまで在住外国人を対象としてきた機関の「やさしい日本語」を活用した具体的な連携の形を明らかにし、体制整備につなげる。また、在住外国人の参加を増やしそこの発話状況などを実際に観察し、どのような日本語が理解できどのような日本語の理解が難しいのか、そのコントロール方法などの実例を見せていくことで、「やさしい日本語」話者の拡大につなげていく。外国人参加者にとっては、まだ日本語に自信がなくても、安心して自身の意見を日本語で話せる場、日本人が聞いてくれる場として、外国人だけのコミュニティから一歩抜け出した居場所が提供できるであろう。							
	☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動								
	取組による体制整備		栃木県国際交流協会、とちぎNPOボランティアセンターぽぽら、宇都宮市社会福祉協議会、宇都宮市ボランティアセンター、大学生からなる外国人支援団体などがそれぞれ結びつくことで、情報はもちろん、人、物も行き交うようになり、外国人住民が自ら、または日本人側からの誘いで社会参加できるような形ができあがる。そういったことは、外国人住民の日本語学習へのきっかけとなり、多文化共生社会の一歩となる。							
	取組による日本語能力の向上		実際に日本人と外国人が交差できる場が創設され、そこで日本人との活動をするにより日本語の習得が生まれる。自分の参加したいこと、興味のあることからアプローチするため、日本人との交流にも対等に参加することができる。							
	参加対象者		各団体代表者（会議体のため）				参加者数 （内 外国人数）		10人 （5人）	
	広報及び募集方法		参加委員が決まっているため、募集は行わない							
	開催時間数		総時間 6時間（空白地域 時間）							
	主な連携・協働先		栃木県国際交流協会、宇都宮市社会福祉協議会、とちぎNPOボランティアセンターぽぽら、宇都宮市ボランティアセンターまちびあ、鹿沼市国際交流協会、大学生ボランティアグループWB、							
	開催場所		とちぎNPOボランティアセンターぽぽら							
	参加者の出身・国別内訳 （人数）		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
			1				1	1	1	
		カンボジア1								
実施内容										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容		指導者名	補助者名	
1	平成28年10月17日 （月） 16:00～18:00	2	宇都宮市中央市民活動センター		マッチングをどのように仕掛けていくのか	どのようにして日本人と外国人を会わせるか、どんな仕掛け作りをこちらがすべきかを検討				
2	平成29年2月24日 （金）	3	栃木市民活動センターくらら	3	障がい者病棟で、国際交流イベントができないか	講師が勤めている病院で、国際交流イベントができないか、また、どんなことができるかを検討する		和代優子		
3										
4										
5										
6										
7										
8										
9										
10										

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第1回 平成28年10月17日】

昨年度の会議をふまえ、実際に何か行動ができないかなどについて話し合った。外国人がボランティアに参加したいとしたら、どんなところが受け入れてくれるのか、また、どんなことを外国人が望んでいるのか、そこにどんな課題が生じるかなど、各立場から意見してもらった。「外国人のボランティア＝人手不足の補充」という考えではないが、そういった方向で考えたほうが受け入れてもらっているという現状があった。外国人が自ら参加するには、「やりたい意思をどこの、誰に伝えるのか」「言葉の力が必要か」などの課題が考えられる。その問題を受け入れる「外国人のための中間支援施設をつくるのか」、またはこういった課題が現場にあるのかなどの分析が必要であった。



○取組事例②

【第2回 平成29年2月24日】

会議をふまえ、実際に一つでも実践を行ってみることにした。今回は、児童指導員として、病院の障がいをお持ちの方にレクリエーション等を行なっている和代氏に話を聞き、そういった施設内で、外国人が実際に何ができるか、日本語力はどのくらい必要かなどについて話し合った。

外国人の方も、それぞれ、自分のやりたいことを考えてきたが、障がいのある方にとっては難しいものもあった。行きたくても外国へは行けない、そういった入院患者のみなさんに、自分が外国人であることをいかし、外国や外国人に触れてもらうということに、みなさん非常に積極的であった。日本に住んでいると、自分の国を紹介したり、自分が外国人であることをいかず場所は、今まで、同じような場所であったが、今回の話し合いの結果、自分が外国人であることを、「誰かのためになるように」活かすことができると、参加者は満足気であった。

講師も、外国人にボランティアとして参加してもらうということは、一度も考えたことがなかったが、話をしているうちに、お互いどんどんアイディアが生まれ、障がいをもっている方にも楽しんでもらえそうだと感想を述べていた。また、和代氏が勤めている病院は日本でも数少ない、障がいをもっている子どもから大人までが長期滞在している病院ということで、ぜひ外国の方が見に来てもらえるといいのではないかと語っていた。

相互に学びになるボランティアになるだろう。実際に5月に予定されている病院内のお祭りに参加できるよう、和代氏が病院に声をかけてくれている。



(2) 目標の達成状況・成果

・「外国人」と「ボランティア」という言葉をどう、一人ひとりが関連づけているかが問題であると感じた。「外国人はボランティアを受ける人」「外国人がするボランティアは翻訳や通訳」「外国人は人手不足の補充ボランティア」「外国人が外国人として参加する」「外国人が日本人と同様に参加する」など、話し合いの中で、そういった考えの相違が浮き彫りになった。実際には外国人が参加しているボランティア活動について、それぞれの立場で把握している事情が違っており、外国人の意見も改めて聞いたことがないということがわかった。外国人がどんなボランティアに参加しているか、どんなボランティアに参加したいと思っているか、そのために必要な日本語力はあるのかなど、改めて分析する必要がある。そういった役割を誰が担うのかということも課題である。県のボランティアを担当している窓口なのか、または県の国際交流協会が担当するのか、外国人が社会参加するための窓口を考えることも今後の課題であると思われる。その際、日本語力について考えることも、日本人と違うところだと思われるので、考慮しなければならぬということも、合わせて日本語教育機関として話していきたい。

・外国人が実際にボランティアをするために開いた話し合いでは、双方に学びがあった。会議後の口頭質問では、外国人側は、自分たちが外国人であることを活かす機会があること、自分の国を誰かのために紹介できることを喜んでいて、また、行ったことのない場所に行くことができること、新しい出会いや発見があることを楽しみにしていた。活動についてもたくさんのアイディアを持っており、その国をそれぞれ自分の形で表現したいということがわかった。国際交流協会のイベントなどでは、どうしても同じメンバーに同じような国紹介をすることが多い。本当に必要とされるところで、自分の考えた形で自分の国を紹介することは、外国人にとっても自信になると思われる。障がいをもつ方へのイベントとなるため、自分の日本語の発音等も見直さなければならない。相手が補完をしてきて話す日本語とは違い、相手にわかってもらうために話す日本語力を、改めて身に付けることも、外国人の日本での生活に自信を持たせるだけでなく、より積極的に社会参加をするきっかけになるだろう。

(3) 今後の改善点について

改善点としては、外国人の日本語力とボランティア参加の関係性を明らかにし、それに対してどんな対策を講じるかなどについて話し合いがあったが、その前の時点で、共通理解をすることが難しかった。外国人に携わっている関係者、またはそうでない人、外国人を住民として捉えている人、そうでない人など、外国人をどんな視点でみており、どのように参加してもらいたいのか、また、外国人がどんな参加をしたいのか、改めて考えなければならない。

そこで、この課題については、運営委員であり、宇都宮大学地域デザイン学部の特任研究員の坂本氏が、大学での研究として扱っていただくことになった。栗又もその一員として参加するが、外国人と地域をどのように結び、社会参加を促していくか、中間支援施設なども交え、考えることになった。外国人を地域の課題として取り上げてもらうこと、そして、そこに日本語教師が外国人対応のプロとして参加できることは、この取組の成果といえるかもしれない。

＜取組4＞										
取組4	取組の名称		外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信							
	取組の目標		栃木県全域に流れるFMに外国人が出演することで、聴取者である地域住民が外国人の存在を知るきっかけとなる。外国人がどこかで困ったり悩んだりしているかを聞くことで、近くに住む外国人の理解を促進できると考える。川柳の作成に、国際交流協会員以外の団体が参加することにより、普段外国人とつながりのない日本人に、外国人と触れ合う機会をつくることができ、そのふれあいを通して、外国人理解が進む。また日本語教師が番組に出演し、「やさしい日本語」で外国人の話を聞きだしたり、フォローすることで、リスナーが「やさしい日本語」がよくわからなくても聞く機会を持つことができ、また、日本語教師という職業をFMを聞いている人が知るきっかけにもなり得る。川柳を作るプロセスで、外国人は日本人の助けを借りながら言いたいことを伝える日本語を学ぶことができ、発表者は声での表現の向上を意識するようになり、より能動的な日本語学習への働きかけとなる。							
	取組の内容		昨年の外国人川柳は、各国際交流協会に呼びかけ、外国人に自分の日本での経験を、川柳として詠んでもらい、集まった中から優秀作品を選び、その川柳を詠んだ外国人に、ラジオ出演をしてもらうというものであった。今回の取り組みでは、昨年の国際交流への呼びかけのほか、取組3などでできた連携から、川柳と一緒に作ってくれる日本人ボランティアを募集し、対話を通して川柳を作成することとする。 1週間に1回3分間のラジオ番組内で、その句を詠んだ背景や、今の生活などを語ってもらい、FMのリスナーに楽しく、在住外国人について知ってもらう。優秀作品は毎週1名選出する。月間優秀賞などを、フェイスブックなどを使い決定する。そうすることで、より番組を広く知ってもらうことができる。 ラジオ番組内で日本語教師は、外国人の話を「やさしい日本語」で聞き出し、聴取者にわかりやすいよう説明を加える。 取組の評価は、番組へのメール等のほか、フェイスブックでのコメント等を参考に、連携団体の評価をまとめ、運営委員会に報告する。これらSNSを通した一般の日本人及び外国人からのフィードバックを公開することで、話すことのみならず、書き言葉における「やさしい日本語」の実践的使用の場として広めることができる。							
	☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動								
	取組による体制整備		各国際交流協会の日本語教室から川柳を募集することで、受身の参加ではなく、積極的参加になると考えられ、当校と各国際交流協会、FMとちぎと各国際交流協会、FMとちぎと外国人が連携することができる。また、国際交流協会のみならず、「国際」などとは関係ないボランティア団体と外国人と一緒に川柳を作成することで、交流が生まれ、地域住民への外国人理解を進めることができる。不特定多数のFMリスナーが外国人の気持ちを聞くことで、外国人とつながることができる。外国人の社会参加に欠かせない「外国人理解」を促進することができる。							
	取組による日本語能力の向上		日本語教室としての直接的な取組ではないが、川柳を作成するという時点で、伝えたいことを言葉にするための日本語を学び、また川柳という日本文化に触れることができる。選出された外国人は、公の場で日本語を話すことになり、改めて、日本語の会話等を学ぶことになる。							
	参加対象者		ラジオ番組聴取者 川柳作成は在住外国人に限る。				参加者数 (内 外国人数)		取組参加数26人 (26人) ラジオ聴取者	
	広報及び募集方法		各国際交流協会にチラシ等を配布し、応募してもらう。SNSも活用し広報を行う。ラジオ内でも宣伝をし、広く番組を聴取してもらう。							
	開催時間数		番組作成時間 約26時間 番組放送時間 約1時間				番組作成1回 1時間 × 26回 番組放送1回 3分 × 26回			
	主な連携・協働先		FMとちぎ、各国際交流協会、各文化ボランティア団体、地域サークル等							
	開催場所		FMとちぎ							
	参加者の出身・国別内訳 (人数)		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
			4	8	2	0	1	1	3	4
			カンボジア(1人)、インド(1人)、ペルー(1人)							
実施内容										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容		指導者名	補助者名	
1	平成28年7月14日(木) 18:00～22:00	4	ラジオベリー	4	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子		
2	平成28年8月18日(木) 18:00～20:00	2	ラジオベリー	2	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子		
3	平成28年9月2日(金) 18:00～22:00	4	ラジオベリー	4	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子		
4	平成28年9月3日(土) 13:00～15:00	2	ラジオベリー	2	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子		
5	平成28年10月16日(日) 13:00～14:00	1	ラジオベリー	1	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子		
6	平成28年10月19日(水) 18:00～19:00	1	ラジオベリー	1	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子		
7	平成28年10月24日(月) 18:00～19:00	1	ラジオベリー	1	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子		
8	平成28年11月6日(日) 13:00～17:00	4	ラジオベリー	4	外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。		栗又由利子		

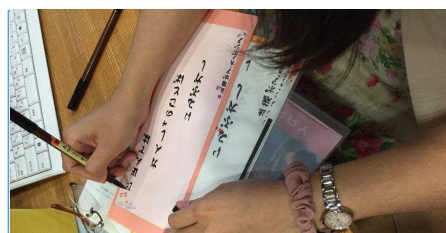
9	平成28年11月16日 (水) 18:00~20:00	2	レディオベ リー	2	外国人出演による多 文化共生ラジオ番組 作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語の アクセントやイントネーション、有効な フィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	
10	平成28年11月25日 (金) 18:00~20:00	2	レディオベ リー	2	外国人出演による多 文化共生ラジオ番組 作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語の アクセントやイントネーション、有効な フィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	
11	平成28年12月29日 (木) 18:00~20:00	2	レディオベ リー	2	外国人出演による多 文化共生ラジオ番組 作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語の アクセントやイントネーション、有効な フィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	
12	平成29年1月17日(火) 18:00~19:00	1	レディオベ リー	1	外国人出演による多 文化共生ラジオ番組 作成と発信	外国人川柳の収録を通し、日本語の アクセントやイントネーション、有効な フィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	

(1) 特徴的な活動風景(2~3回分)

○取組事例①

【第1回 2016年7月14日】

地域に在住する日本人の配偶者として暮らす外国人の方に参加してもらった。それぞれ、家族に手伝ってもらったりしたようだが、決まった文字数のなかに、自分の気持ちを表現する日本語を入れることに苦労したようである。参加した外国人の方は、普段、通訳などもしているが、決まった文字数の中に入れるために、新しい言葉を学んだり、日本語の言い回しなどを学習できたと言っていた。実際の録音では、緊張した様子ではあったが、自分の思いを話すことが出来、とても楽しかったと感想を述べていた。



○取組事例②

【第11回 2016年12月19日】

真岡市国際交流協会の相談員の方が親子で参加してくれた。実際に、息子さんは日本生まれ日本育ちであり、日本語には全く問題がない。しかし、国籍は「ブラジル」であり、「外国人」とされることも多い。そういったこともたちが今、たくさんいることも聞いているリスナーに感じてもらえた、または、「？」と疑問に持ってもらえたことと思う。「外国人」という枠組みをどの誰に当てはめるのか考えるいい機会になった。母親のほうも、日系人の子どもとして来日し、日本語が大変だったこと、そして、今、翻訳通訳の仕組みがあるおかげで、たくさんの方が日本語を使えなくなっていることなどを話してくれた。本当に「生活する外国人」として何が必要で、何が不要なのか、そして、私たち日本人はどんな地域に、どんな地域に住む外国人を想像しているのかを考えなければならないと感じた。



(2) 目標の達成状況・成果

終了後の外国人へのインタビューでは、「楽しかった」「日本語、まだまだ難しい」「自分の声、日本語なんか変」「勉強しなくちゃね」「日本人にわかってもらえたかな」などの声が聞かれた。ラジオ収録という経験が、本人の日本での生活への自信を後押ししたと考えられる。終了後の表情は、本当に満足気であり、「日本人でもしたことのない経験ができた」ということは、本人たちの中のプライドを刺激し、いい意味での優越感を味わえたのではないと思う。日本に住んでいると、なかなか自分の立場が上になることは少なく、何をするにも、わからないことが多く、日本人に聞くことが主であるが、こういった活動で、自分の言葉で、自分の思いを、日本人も経験したことのないような場所で経験できることは、在住の外国人にとって本当に刺激があり、日本語を上達させるいい機会になったと考えられる。今年度は、2年分をまとめ、冊子を作成した。関係する分野以外の方が喜んで読んでくれ、外国人の方への理解を促進することができたと思う。ラジオでの、不特定多数の住民への外国人理解、そして、冊子による、気軽に簡単に時間にとらわれず、楽しくできる外国人理解の相乗効果が今後どのように出てくるか楽しみである。冊子は今後、介護施設などにも置く予定であり、「暇つぶし」のような感覚で、外国人に触れてもらい、理解を深め、広めてもらえればと考えている。

(3) 今後の改善点について

参加する外国人の募集に課題が残った。昨年度は鹿沼市国際交流協会の全面的協力、募集することが出来た。しかし、今年度は、新たな団体、特に日本人との連携を視野に入れ、募集を行なったが、内容の理解と、「川柳は外国人には難しい」という考えから、外国人、日本人双方から、敬遠されてしまった。こういった固定概念を覆そうと、説明を丁寧に行なったつもりであったが、外国人は川柳がわからない、日本人は外国人像が思い浮かばないということから、うまく受け入れてもらえなかった。来年度は、今年度作成した冊子をもとに、説明をし、日本人、外国人双方の理解を得、できれば、国際交流協会から推薦をしてもらいたいと考えている。日本人のリスナーからの感想を聞くことは難しいが、「聞いたことあります。面白いですね」「私が聞いた回、まだ覚えてますよ」などの声をいただいた。今後は、参加者が増えるよう、冊子を使用しながら、丁寧に説明していきたい。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

「やさしい日本語」を外国人の日本語学習の指針とし、その「やさしい日本語」を活用して社会参加を促す。また、地域住民の外国人とのコミュニケーションツールとして「やさしい日本語」を普及していくことを事業の目的とする。

多文化共生社会における地域の共通語としての「やさしい日本語」を普及させることは、在住外国人と日本人の相互理解を深めることにつながり、外国人の社会参加を促すことになる。

このため、在住外国人には、コミュニケーションツールとして学ぶべき最低限の日本語としての「やさしい日本語」を自己表現や、社会参加のために使用できるよう学んでもらい、日本語学習の必要性を感じてもらい、地域住民には、「やさしい日本語」を見聞きし、自分も使用の機会を得ることで、外国人理解を促し、多文化理解への足がかりにする。

こういった双方の「やさしい日本語」がつながり、外国人への日本語教育の重要性を双方が理解できるようになる。また、「やさしい日本語」を通じ、外国人と接することは、地域における外国人理解を促進し、多文化共生社会実現のための足がかりとなる。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

「やさしい日本語」をどのように理解してもらうかということでは、実際に外国人とコミュニケーションをとることで、体感してもらうことができた。その中で、確認できたことは、外国人と関わりを持っている、または、持ったことのある日本人が少ないということである。「外国人と話してほしい」と取組参加のお願いをすると、「英語がわからない」「外国語はわからない」「なにを話せばいいのかわからない」という質問を受ける。「外国語は必要ない」と説明しても、「コミュニケーションをとるのが難しそう」「わからなかったらどうしたらいいか」などの答えが返ってきた。こういった答えが返ってくるため、なかなか参加者を募ることが難しいが、参加をした日本人の感想は、「参加してよかった。意外と日本語が通じる。話すことも結構ある」「ちょっと考えるけど、通じるとうれしい」「簡単な日本語を話すのは反対に難しいね」というものであった。

これらのインタビューから、日本人側には、「やさしい日本語」を体感してもらうことで、外国人と日本語でコミュニケーションがとれること、外国人は「わからない人」ではなく、「話せばわかる人」だと感じてもらうことができた。これはまた、外国人が「やさしい日本語」を習得することの意義でもある。最低限の日本語を習得することは、日本人とコミュニケーションをとることができ、新しい世界を持つことが出来る、また、話さないことで起こる摩擦を減らすことができる。これは、外国人が社会参加するためにも重要な点であり、外国人の日本語学習意欲を後押しすることであると考えられる。

「やさしい日本語」を外国人が習得することは、上記に述べたように、日本人とのコミュニケーションを促し、それが、学習意欲へとつながっていく。外国人へのインタビューでは、「日本語を習得することは必要である」「自分の気持ちを日本語で伝えることができることは絶対必要」などの答えがあった。「自分の気持ちを日本語にできて楽しかった」「言い方を覚えたいといけなくて」「人に伝える言い方を学びたい」という感想もあった。実際に日本語を話せるというだけでなく、「自分の思い、気持ちを日本語にする」ということも、外国人にとっては非常に重要なことであると考えられる。

「やさしい日本語」というカテゴリーの中で、「災害時」「公文書」などの分野が取り上げられているが、「自分の気持ちを表現する」ということについても考える必要があるだろう。今回の事業を行う中で、「やさしい日本語」を日本人の立場から考えるだけでなく、外国人側からの発信のツールとして考えていくことも重要だと感じた。「理解するためのやさしい日本語」だけでなく、「発信するためのやさしい日本語」についても、今後外国人の方と話しながら、考えて生きたい。

(3) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

地域の連携ということでは、栃木市との更なる連携ができた。栃木市の「協働まつり」に参加したことで、多機関の関係者と知り合うことができた。外国人の存在をたくさんの方々に知っていただけた。このイベントに参加するにあたり、共にブースを持つ団体との会議が数回あり、当事業の内容を理解していただき、いろいろなアイデアももらった。中間支援施設の勧めで、栃木市のコミュニティラジオ「くらら」にも出演し、イベントの参加について話すとともに、在住外国人について、また、日本語教師という仕事についてもエフエムを通して話すことが出来た。聴取者などの人数ははっきりとはわからないが、不特定多数に外国人についての話ができたことは、効果があるのではないかと考えている。イベント当日にも、一般の来場者が川柳を見たり、DSTの映像や資料を見ることで、外国人の存在を地域に広めることが出来た。「こんなに外国人っているんですね」「英語じゃないんだね」などの言葉を聞くことができた。会場で実際に外国人の方と話した日本人は、「日本語上手ですね」「すごい」などの言葉をかけていた。これは、日本人が外国人に対して持つ固定観念があるということだろう。関係者だけでなく、「無関係者」に外国人の存在を伝えられたことは、イベント参加の意義があったと考えている。

地域の大学との連携でも、「無関係者」に外国人の存在を伝えられた。大学との連携では、関係者と連携をし、大学生がオープンしているカフェでミーティングを行ったりしたが、発表は、大学の学祭で行うことができたため、外国人とは普段関係のない学生に接触できた。こういった連携を今後も行っていきたい。

国際交流協会との関係では、栃木県国際交流協会の事務局長が運営委員会に入ったことにより、広報の幅が広がった。今までも県の国際交流協会とは連携してきたが、実際にこの事業を深く理解してもらっていなかったため、なかなか思ったような効果がなかった。しかしながら、今年度運営委員として入ったことにより、よりはっきりと、目的、事業内容等を理解してもらい、協力体制を築くことができた。

市町単位では、昨年に引き続き、鹿沼市の協力を得ることができた。その他、佐野市も積極的に参加をしてくれた。真岡市については、昨年までもお願いをしてきたが、実際にはなかなか協力が得られなかった。しかし、今回は、運営委員である県の国際交流協会事務局長が真岡市国際交流協会に同行してくれたため、川柳の応募など、反応があった。やはり、だれにどんな協力を得るかが重要であると感じた。

川柳の冊子の配布については、運営委員を通して各所に配布した。また、協力団体にも配付した。その中で、エフエム栃木からの提案で、外国人川柳の番組を褒賞に応募することになった。こういった場所に応募することで、また普段外国人と接しない人へ在住外国人のアピールをすることができる。地域と地道に少しずつ司会を深めてきた結果だと感じている。

(4) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

事業実施にあたっては、各国際交流協会への呼びかけと、中間支援施設への呼びかけを主に行った。DSTについては、チラシだけではなく、製作過程をイラストにし説明を行うなど、わかりやすい広報に努めた。

事業成果の発信として、DSTでは、イベントでの発表、また、日本語教室の参加者が参加し作成した作品は、日本語教室内での発表を行った。日本語教室で行った発表会では、関係者が見学に来ており、ぜひなにか企画したいと当校に協力を求めている。今後、協力していきたい。

成果の発信としては、取組2も発信であるが、特に外国人川柳は、冊子として2年分の川柳をまとめ、それを配布した。各所から、冊子の希望もあり、また、学校では、国際理解教育の教材として考えてみたいという話もあった。来年度も採択されているので、冊子と募集チラシを国際交流協会等と一緒に送り、更なる外国人の参加を促していきたい。

(6) 改善点、今後の課題について

外国人への日本語教育として、「自分の言葉で自分を表現する」ということに重点をおいた教育が必要であると感じた。5年間継続して「やさしい日本語」に取り組んできたが、「理解を促す」という日本人側からの「やさしい日本語」ではなく、本人主体の「自分を表現する」という角度からの「やさしい日本語」教育を外国人にしていけることは、今後の地域日本語教育で必要なことであると事業を通じ考えた。今後は、外国人が「やさしい日本語」を、「日本の生活を理解するために学ぶ」ということではなく、外国人が「やさしい日本語」を「自分を表現するために学ぶ」という角度で、地域在住の外国人への日本語教育を考えたい。

(7) その他参考資料